茨城県近代美術館 友の会会報　Yubi No.111

游美

Contents

1　松川 誠さんの作品と作品についての言葉
2-3　美術鑑賞旅行
4　作家探訪　石村 雅幸先生
5　絵画講習会
会員のためのギャラリートーク
6　心に残る私の一点
あとがき

松川　誠　《仁王像》
2024年
油彩・カンヴァス／F80
2024年度茨城県芸術祭美術展覧会

「ああ、どうしよう、時間が無い。先生のコメントを全部は反映できない。屋外が暗過ぎるし、室内が明る過ぎる。それに、仁王の顎がやや大きいし、首回りが少し変だ。どうしてこうなった？直せるか？それにしても時間が無い。ああ……」というのが、県展の搬入日２日目の朝だった。そんな時、高い所から「どうせへたくそなんだから、さっさと持っていきなさいよ」という、少々投げやりな連れ合いの声が聞こえてきた。で、急ぎ生乾きのキャンバスにサインを入れ、仮縁に収めて近代美術館に着いたのがお昼前だった。だから、まさか入選するとはこれっぽっちも思っていなかった。

それにしても游美の編集者は、本紙に寄稿して頂く方の人選に相当苦労されているらしい。単純に絵画が好きというだけのビギナーから抜けられない私なんぞに、どうして表紙の原稿を依頼したのだろうか。「出来る事は断らない」が信条とは言え、本当に恥ずかしい事この上ない。　（水戸市在住）

九州へ

2025年10月21日～23日、会員37名が、・佐賀県立九州陶磁文化館：《開館45周年記念 初期伊万里ビッグバン》・出光美術館：髙木大輔学芸員の解説で《開館25周年記念 琳派の系譜－宗達、光琳と江戸琳派》・福岡市美術館：《珠玉の近代絵画「南国」を描く》・福岡県立美術館：《没後50年髙島野十郎 展》・九州国立博物館：《法然と極楽浄土》を鑑賞しました。途中、有田ポーセリンパーク、大濠公園散策、太宰府天満宮参拝もしました。

2025年10月21日　佐賀県立九州陶磁文化館にて

有田焼に魅せられて　　小関　照子

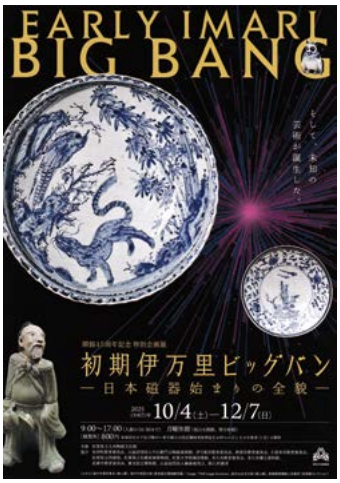
今年の夏は異常に暑かった。九月に入っても衰える気配がなく、暑さが続いた。そんな中、茨城県近代美術館友の会より、九州美術鑑賞旅行の案内が届いた。最初に目に飛び込んだ文字は有田である。有田焼が鑑賞できるということで旅行を申し込んだ。しかしながら、１名参加で、誰も知らない。不安が先に立った。その不安は、食事や美術鑑賞などで友の会委員の方々や参加された皆様に親切にして頂き、消し飛びました。誌上を借りまして、お礼申し上げます。有田焼がいいなと思うようになったきっかけは、地元で開かれた陶器市で買い求めた小皿とお猪口のセットでした。店主は古伊万里で金継ぎもできるよという。色合いが気に入って今でも使っています。

福岡空港に到着後、観光バスにて有田ポーセリンパークに向かいました。すぐ目に飛び込んできたのが、ツヴィンガー宮殿でした。その大きさと荘厳さに圧倒されました。ドイツ、ドレスデンにある宮殿を模したそうです。有田とドレスデンは姉妹都市となり有田の魅力を国内外に発信するためポーセリンパークをオープンさせたそうです。因みにポーセリンは磁器を意味します。ただ残念だったのは館内は閉館中で、伊万里港から輸出された磁器を鑑賞できなかったことです。しかし、公園内には、耐火レンガの廃材や使い捨ての窯道具を赤土で塗り固めて作ったトンバイ塀や昔の染付職人仕事場の陶壁絵画など興味深いものが有りました。

有田ポーセリンパーク構内のトンバイ塀（筆者撮影）

その後、佐賀県立九州陶磁文化館に移って、ここもまた、私にとって、ため息がでるほどの陶磁器に出会いました。鍋島焼の精巧な美しさから庶民が日常使う器までそれぞれの良さがあります。感じたことは、この土地は大陸に近くてその文化がすぐ入り、吸収し創り上げたことで、私達は今日堪能できると言う事でした。私は東北人（いわき市在住）なので、文化、環境の違いを思いました。ともあれ、からくり時計やトイレの調度品などは楽しんで接することができました。

２日目は北九州に移り、午前中は門司港レトロ地区にある出光美術館門司とその散策です。同館では「琳派の系譜」の特別展が開催されており、本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一、鈴木其一まで教科書でしか知らない書画に接することができました。特に俵屋宗達の「風神雷神図屏風」を模写した酒井抱一のそれを鑑賞でき、びっくりです。もっと、ゆっくり観たかったと思いながら旧門司三井倶楽部にある昼食場所に向かいました。　（いわき市在住）



佐賀県立九州陶磁文化館で観た展覧会チラシ

九州の文化 アート 自然

大木　明子

旅２日目、広がる曇天にも旅心爽やか。門司港周辺散策前の昼食三井倶楽部、河豚さしなど美味。この倶楽部２階は地元名士　林芙美子資料館、直筆の原稿なども。さらにアインシュタイン初来日時使用のベッドなど大正ロマンの香りただよふ。食後街歩きレトロ門司港、コーヒーの香もレトロ、同行の娘と堪能。

30年を迎えた福岡市美術館へ向かふ。筑前福岡藩黒田家伝来の美、仏像、茶道具、東南アジアの陶磁器、染物。九州からアジアへ広がる様々なジャンルの古美術収蔵品数々、30周年特別展は近現代美術。ミロ　ダリ　草間彌生と幅広く。夕食は博多料亭「稚加榮」松茸のお腕も香ぐはし。

最終日初めて快晴秋めく青空、浮き雲も愛らし。陽光の大濠公園散策、秋色水鳥の湖辺、黒田藩在りし日を偲ぶ景観、桜の名所であるとも。長い濠沿いに蓮林立、夏であればさながら蓮花浄土であろうかと。

福岡県立美術館へ。開館40年記念展、髙島野十郎没後50年展（NHK日曜美術館で紹介あり）孤高の画家の全貌、一本の蝋燭に宿る闇と光、孤高の美、月も太陽も花も野十郎の美の奥深さ。孤高であって孤独ではない。あらためて「美」とは？心に問ふ。去り難し。

髙島野十郎　《蝋燭》
大正期／油彩・板／22.7×15.6cm／福岡県立美術館蔵

2025年10月22日 福岡市美術館にて《珠玉の近代絵画「南国」を描く》を鑑賞する会員

この旅最後の昼食「ホテルカルティア太宰府」。名に反し和の古めかしい趣。大宰府天満宮に隣接。かつて盲目の画家のアトリエであったと。デザートこまごま愛らし。食後天満宮参拝、散策それぞれに。万葉のふるさと歌碑をなつかしくよむ。本殿改修中現在参拝出来る仮殿屋根は丈１ｍを超えるかと草々の緑が覆ふ奇観。最後の九州国立博物館へ。国宝1200点以上の作品群。東京、奈良、京都に次ぐ国立博物館。2005年開館。コンセプトは「日本の文化の形成をアジア史的観点から捉える」。周囲の大自然をそのまま映す圧巻のガラス張り外壁、圧倒!! 時間内にはとても鑑賞不可能。文化交流を図る、旧石器から安土桃山江戸時代を追ひ各部屋に陳列。20周年記念展の今展「法然と極楽浄土」音声ガイド松本幸四郎、市川染五郎の美声。壮大な仏教世界を一時、皆それぞれの目的、楽しみ方で２時間、旅のしめくくり存分に満喫。福岡空港へ、茨城空港着20時10分。

関係者の皆様同行の皆様に感謝　ありがとうございました。

秋麗の旅や出会ひし孤高の美

（水戸市在住）

2025年10月23日 九州国立博物館（大宰府市）前　参加会員

日本画家
石村 雅幸先生を訪ねて

週刊新潮：本田武士氏撮影

巨樹の声を聴く

茨城の南端、利根町の閑静な住宅街にある画室　雅幸画房で、やさしい笑顔の先生が私たちを迎えてくださった。

福岡県古賀市で生まれた先生は、４歳から小学校４年生の夏までを愛媛県松山市と松前町の豊かな自然の中で暮らした。神社の幼稚園には大きな樟があったことを憶えているという。愛媛はご両親のルーツでもあり、大切な場所である。

日本画の道

高校時代には緻密なペン画を独学で探求、イラストレーターに憧れていたが、その頃観た山口華楊の作品に日本画の品格と深さを見、日本画を専攻することになる。華楊の生命への眼差しに共鳴するものが先生の中に既にあったのだと想像する。

大学４年の夏から院展に出品し、初入選まで３年かかった。２度目に落選した作品を玉川大学OB有志展に展示したところ、当時71歳の森田曠平先生が来場、「審査で拝見した作品ですね、憶えています。私の研究会においでなさい」と自ら誘ってくださった。強運の持ち主である。29歳までの６年間教えを受けることができた。画室の壁には森田氏の写真が掲げられている。

大学の卒業制作は平等院鳳凰堂を描いた。院展に10年連続で入選した作品も古建築である。いつしか、建築の完成された人工美を画面に再現する事に意味がどれだけあるのかという疑問が生まれ、悩むことになる。

巨樹との出会い

35歳の冬、茨城県行方市西蓮寺の大銀杏との出会いが、院展で巨樹をテーマとする始まりとなる。翌年、かすみがうら市の出島の椎の傍らに、父親になったばかりの先生は息子さんと奥様を描いた。作品の前で涙を流すご婦人を見てこの絵の持つ命に気付いたという。以来25年以上を巨樹と向き合ってきた。

巨樹の在る場所を訪ね、自分の魂と響き合う樹を探す。ものすごいエネルギーを持っている巨樹の中には、描けば魂も命も吸い取られそうと諦めるものもある。「吸いとられつつ戴きつつ、何とかいけるんじゃないかという樹に出逢うと描かせてもらいます」。妥協の無い放浪の末に樹を見つけると、１日かけて最適な視点を決める。写生に初めは50号を用いてみたが、前がよく見えず大変で、今は30号、40号を使う。写真は一切使わず、時に樹皮に触れる距離感で低い位置から見上げ、木肌、枝葉の一つ一つ全てを刻み込むように鉛筆で画面に描きとる。遠方取材では車で寝て、現場写生にほぼ１ヶ月を費やす。画室に戻ってからは２ヶ月ほどで完成させるという。質量共に途方もない作業である。50代までは１日の制作時間が15～16時間に及ぶこともあった。

とてつもなく大きなものに触れる

巨樹の持つ力に圧倒され、畏れ、見つめながらひと月ほど樹のそばで写生をしていると、巨樹がこころを開いてくれる。その美しさと深さに魂を震わす。そして風雪に耐えた何百歳という存在は、太古の昔から連綿と生命を受け継ぎ受け渡してきた大きな意志があることを先生に感じさせてくれるという。

最後に先生は、司馬遼太郎が樹齢千数百年という樟に寄せた言葉を紹介してくださった。「ふと、人間だけがこの世の主人公でいるということの愚かな錯覚から、自分が少し脱け出せたのではないかという感慨ももった」。

画室の先生　週刊新潮：本田武士氏撮影

《神代桜》2010年／岩絵の具・高知麻紙／S100
再興第95回院展奨励賞／個人蔵

《樹洞》2016年／岩絵具・高知麻紙／215×170cm
再興第101回院展／印西市蔵（印旛支所に常設）

石村（いしむら） 雅幸（まさゆき）

1965　福岡県古賀市生まれ（本籍地愛媛県四国中央市）
1988　玉川大学芸術学科美術専攻日本画課程卒
1989　第43回春の院展初入選（同展入選30回、無鑑査2回）
　　再興第73回院展初入選（同展入選33回、無鑑査2回）
1990　第44回春の院展出品作外務省買上（同買上3回）
1998　茨城県芸術祭美術展覧会（茨城県展）初出品、県展会友に推挙（以後毎年出品）
2005　第4回現代茨城作家展（以後9回連続選抜）
2006　再興第91回院展『精魄』奨励賞（2008、2010、2013年にも）
　　茨城県展木村武山賞
2007　第62回春の院展『寒樹炎炎』奨励賞（2008、2009、2010年にも）
2013　伊勢神宮式年遷宮特別展　歌会始によせて－立－選抜
　　茨城県展永田春水賞
2015　蛟蜩神社（利根町）天井格子画制作
2016　巨樹の声を聴け－石村雅幸展（水戸常陽藝文センター企画）
2017　第23回うしく現代美術展（以後連続9回推薦）

師　森田曠平・伊藤彫耳
現在　日本美術院特待、茨城美術会副会長、茨城県展委員（審査員5回）
住所　茨城県北相馬郡利根町

絵画講習会［講師　関 徹 先生］

2025年9月28日、10月5、12日

講習会に参加して

加畑　久美子

９月末から10月第２週目までの日曜日の午後、３日間をかけて人物モデルを描いた。モデルのポーズは参加者の多数決で、足を組み膝の前で両手を組んだ姿勢に決まった。

デッサンは20分の実技と10分の休憩の繰り返しで進んでいくが、時間ばかりが過ぎてゆく気がする。横を向いた顔と左右の肩、肘と手首、組んだ足の位置、全体のバランス、など考えてばかりで一向に進まない。と思っているところに関先生のアドバイスがあり、ほっとする。先生が全体を見てくれているため、さながら船頭のいる舟のようで、だんだんと視界が開けていく。それでも午後の３時間は瞬く間に過ぎ、３日間でなんとか全体を描き終えたという感じだった。私はモデルを左横から描いたが、額から顎までの造形がなかなかできず苦労した。また、ワンピースのひだや模様をもっと観察できればよかったと思う。

2025年10月12日 講習会風景（手前右端筆者）

最終日、先生のお話を聞くことでひとつひとつの作品の見どころがよく理解できた。鉛筆や木炭のデッサンは線の強弱が美しいと思った。また油彩画は、色彩で人物の雰囲気を表現しているように感じ、特別な美しさがあると思った。

14名で同じ人物モデルを180度いろいろな角度から、様々な素材を使用して描くというのは、とても貴重な体験で、楽しく充実した時間だった。

企画、ご準備をしていただいた企画委員の皆様、ありがとうございました。　（水戸市在住）

会員のためのギャラリートーク

2025年10月16日

《安野先生のふしぎな学校　津和野町立安野光雅美術館コレクション》

2025年9月13日～11月16日

ギャラリートークに参加して

“絵本をはじめ、装丁デザインや文筆の仕事でも豊かな才能を発揮した、画家・安野光雅。本展では、絵本の原画を中心に、安野の作品約150点を、こくご、さんすう、りか、しゃかいなどの学校の授業科目に見立てた構成でご紹介します。”

（美術館だよりから）

安野先生の絵本は、皆さんどこかで出会っているはず。でも、原画から感じ取れる面白さは一味違う。首席学芸員吉田衣里さんのギャラリートークはその見どころを次々に楽しく教えてくださる。小学生の気持ちになって、“勉強することは「インポータントではなくインタレスト」”と安野先生が初めてのヨーロッパ旅行で出会った言葉を体感することができた。また、面白いものを見つける。知ることで面白いと感じるものがその人の中に積まれていく。そんな小学生の頃が一生を決める、とも。もう遅いかもしれないが、まだまだ面白がる気持ちを持ち続けたい。と、沢山のワクワクを発見してしまうギャラリートークでした。　（会報委員会）

2025年10月16日 講師の吉田首席学芸員（前列中央）と参加会員

心に残る私の一点

五百城文哉《晃嶺群芳之図》

蛭田　伊美子

47年前私は水戸に就職した。水戸市立博物館での特別展『五百城文哉』(1983年)は故郷(勿来)を懐かしく想い出させるものだった。平潟港や明治時代の肖像画、農婦と子どもや収穫の絵に、幼い頃、薩摩芋の苗床に使う木の葉を杷(さらい)に耕運機に乗って県境の山へ両親と行ったことを想い出す。

五百城文哉は明治になる５年前、幕末の1863年水戸金町に水戸藩士の子として生まれ、1906(明治39)年42歳で無名の画家として日光で生涯を閉じた。父は文哉４歳の時、城下三の丸手前で天狗党に襲われ斬殺されている。残された幼い子を守るため母はよく切れる脇差を彼に持たせていた。

文哉は新潟や茨城県北、大子や多賀地方を遊歴し、土地の名士の肖像などを描いていたが、1892年万国博覧会に出品する日光東照宮陽明門を描くため日光に向かう。国際観光都市日光で海外からの観光客向けに風景画を描いた。土産として持ち帰った絵が海外での評価が高くなり、それらが「里帰り」し、更に15歳で文哉に弟子入りした小杉放菴が終生師を敬愛し、顕彰する努力を惜しまなかった。

植物の宝庫である日光で自宅に日本で最初と言われるロックガーデンを築き植物の研究をし(皇太子が訪問)、精密で生き生きとした色彩で描いた。森鷗外は「コロリスト(色彩画家)」と評している。植物学者牧野富太郎は五百城宅に滞在し共に植物採集をしている。

樹は力強く斜面に根をはらして伸び、樹幹の下には開花時期の異なる高山植物の草花が一斉に咲き、遠景に日光男体山を眺望するこの絵に私は、巡り来る人生のさまざま(苦難含)を受け入れ、調和し、自分なりの根をしっかり張り、清らかに生きる(咲く)ことの尊さを感じ、深く魅せられてしまう。　(水戸市在住)

五百城文哉　《晃嶺群芳之図》
明治30年代頃／絹本・水彩・軸装
127.0×56.5cm／水戸市立博物館蔵
水戸市指定文化財

〈友の会からのお知らせ〉

- 2026年度　理事会・代議員会を2026年５月９日（土）に地階会議室で実施する予定です。
- 春の国内美術鑑賞旅行を、2026年５月12日（火）の日程で、東京方面日帰りで計画中です。
- 「水墨画を楽しむ７つのとびら展」ギャラリートークを、2026年５月20日（水）に実施する予定です。　（企画委員会）

あとがき

○近頃の長期天気予報はよく的中するような気がする。酷暑の長い夏、秋を飛ばして冬が来ると。その通りになった。外出を躊躇うような天候の日も美術館では心地良く芸術鑑賞ができる。ギャラリートークに参加すると学芸員から、目から鱗、思わず膝を打つ解説を聞く事ができる。さあ、もっと美術館へ足を運んでみませんか。

○石村 雅幸先生に、先生のお写真の掲載許可を、週刊新潮 本田 武士氏より取得していただきました。お二人に厚くお礼申し上げます。

○福岡県立美術館 中島 由実子 様から高島野十郎《蝋燭》の掲載承認及び画像データの無償貸与をいただきました。厚くお礼申し上げます。

○水戸市博物館　中村 有紀子氏より五百城 文哉《晃嶺群芳之図》の掲載許可および画像データの無償貸与をいただきました。厚くお礼申し上げます。

茨城県近代美術館 友の会会報
游美　No.111

発　　行　2026(令和８)年３月
編集・発行　茨城県近代美術館友の会
〒310-0851
水戸市千波町東久保 666-1
TEL.029-243-5111（美術館内）
E-mail：f.momaibk@gmail.com
ＨＰ　：https://fmoma.com/

印　　刷　株式会社 光和印刷